

<研究成果の紹介>

保温性のある寒冷紗を活用した「カラ」の安定生産技術

紀南かんきつセンター

1. 成果の内容

「カラ」は全国的にも産地がほとんどなく、近年高級カンキツで売り出している東紀州地域の目玉商品です。しかしながら、かいよう病に弱いこと、樹上での越冬が必要で、低温によるす上がりが心配されること、冬期の落葉が激しいこと、収量が少ないことなど、安定的に生産していくためには、いくつかの課題をかかえています。

そこで、現地にネット栽培施設の導入が進んでいることから、この施設を利用して保温性のある寒冷紗で冬の間被覆を行い、低温と寒風による果実と樹体の被害を軽減しようと考えました。

本試験では、パイプハウスを利用して12月から4月まで被覆を行ったところ、露地と比べて施設内は、低温時に約1℃～2℃高くなりました(図1)。これにより、果実のす上がりの発生が軽減されました(図2)。また、冬期の寒風による落葉も明らかに軽減し、着葉数が多くなりました。被覆することにより施設内は、露地に比べ約10%遮光され、降水量が20～27%程度に減少しますが、果実品質・樹体生育に大きな影響は見られませんでした。

2. 技術の適用効果と適用範囲

す上がりを軽減することで、商品率が向上します。また、冬期の落葉が減少することから、樹体生育が安定し、隔年結果の防止による連年安定生産が期待できます。東紀州地域を中心に栽培されている「清見」等の越冬中晩柑類にも活用できると考えます。

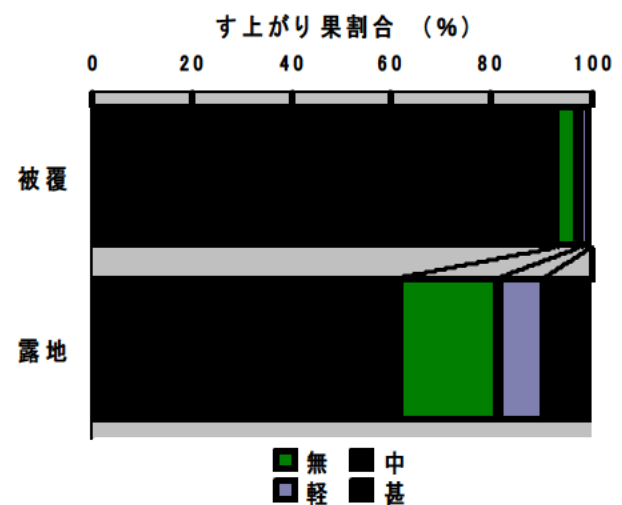
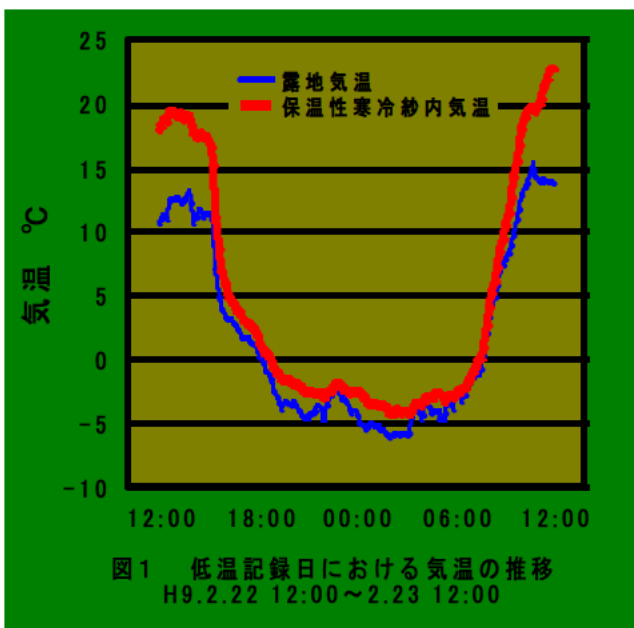
また、鳥や野生動物による被害はほぼ完全に防ぐことができますし、無袋栽培が可能になり、袋掛け作業の省力化が期待できます。

3. 普及・利用上の留意点

パイプハウスあるいはネット栽培施設がすでにある場合、被覆資材と簡単な改造で導入が可能です。ただ、平棚施設の場合は天井部分の寒冷紗固定に工夫が必要です。

寒冷紗は4年程度充分に耐用しそうですが、傷などによる裂けには注意が必要です。さらに、1年経過しますと少しずつ縮みますので、初めて張る場合、若干の余裕を持つ必要があります。

(かんきつ担当 鈴木 賢)



☒ 1

☒ 2